

日本農学アカデミー12年の歩み

回想—日本農学アカデミーの設立

岡野 健

日本農学アカデミー会員

日本農学アカデミーが設立されたとき、日本学術会議第6部の会員だった私は、アカデミーの性格・役割に思いを抱いていて、その設立に積極的に関わった。私が果たした役割は裏方の推進役だったが、設立までのいくつかの印象に残っている出来事をメモと僅かな記憶を頼りに記す。

- **設立日：** 日本農学アカデミーが設立されたのは1998年11月30日である。設立総会が当日の午後3時、六本木の学術会議部会室で開催された。部会室ではなく会議室というのかもしれないが、当時の学術会議には7つの部会があり、第6部農学が使う部屋が決まっていた、それを部会室と呼んでいたと思う。設立に積極的だったごく少数の人たちは、感慨深くこの時を迎えたと思う。私もその一人だった。
- **設立準備委員会：** 第6部会で長堀部長から農学アカデミーを設立したい旨、話があったのは1998年の前半だったと思う。吉川弘之会長から(社)工学アカデミーの果たしている役割を訊き、佐々木恵彦副会長がIPの準備をされていたことなどがきっかけとのことだった。

私はある委員会(第4常置委員会)に所属していて、我が国が科学技術創造立国として進んでいくためのいくつかの課題を議論していた。いま当時を振り返ると、私には、学者・研究者は自らに取り組む課題を自主的に決めて、その成果を公表するだけでは不十分で、その成果の使われ方にも責任を負わなければならないという思いがあった。責任は個人ではなく組織が負わなければならない。その組織は学術会議ではなくアカデミーだと思った。なぜなら学術会議は総理から任命された会員による組織であり、成果を使う側

でもあるからである。農学アカデミーは工学アカデミーとは違うと思った。

設立準備委員会という会があったかどうかは定かではないが、設立には農学の幅広い学者・研究者の賛同を得なければならない。そのために農林水産技術会議ならびに全国農学系学部長会議の賛同が必要だった。

- **農林水産技術会議ならびに全国農学系学部長会議との会談：** 1998年のある日、農林水産技術会議の方々数名と日比谷公園のレストラン、多分日比谷花壇で面談した。長堀さんが一方的にアカデミーの必要性を説き、とくに議論はなかった。前年の諫早湾の水門を閉ざす映像が論議を呼んでいる時で、干拓の専門家である長堀さんは、食料は必ず足らなくなるから水門閉鎖は当然のことと言い切り、技術会議の方々があっけにとられていたことを思い出す。当時の技術会議の責任者は現農学アカデミーの会長である三輪睿太郎さんだった。もちろん出席されていたが、先にお聞きしたら記憶にはないとのことだった。お忘れになったのだろう。

全国農学系学部長会議との懇談は1998年6月5日、午後3時から東大農学部の図書館会議室で行われた。日時が正確なのはこの懇談が困難を極めたからである。端的に言えば、全国農学系学部長会議の方々には新たな組織を設立しなければならない理由が見つからない、したがって全国農学系学部長会議に持ち帰っても理解を得られる見通しが立たないということだった。事前の話、いわゆる根回しはまったくなかったか、あってもうまくなかったらしい。そんな懇談会があることを東大農学部当局は誰一人知らなかったか、あるいは黙殺したらしい。ひょっとしたら根回しは私の仕事だったかもしれないが、当時第6部の会員30名のうち14名が東大農学部であり、その方面の錚々たる面々がいたわけだから私の出る幕ではないと思った。

学術会議、日本農学会、財団法人農学会があるではないかという全国農学系学部長会議の方々の言い分の方が勝っていると私にも思えた。問題は日本農学アカデミーがなぜ必要か、何をするかである。私は、日ごろから胸にあった“農学に関する科学技術政策を策定し、実施する立場から一定の距離において、政策ならびに政策がもたらした結果について大局的観点から評価し、長期的展望に立って意見を述べる組織”であり、既存の組織では出来ないこ

とをすと言った。その言葉を待っていたかのように、中井さん(静岡大学農学部長)、小島さん(新潟大学農学部長)が賛同して下さり、気まずい空気は一転した。

- **ホームページ：** 会報を出す経済的ゆとりがない。しかしなんとかしなければならぬ、というわけで HP を作ることにした。当時 NACSIS が学協会に対し無料でサイトの維持をサービスしていた。たしかホームページメーカーというソフトで立ち上げた日本農学アカデミーの HP は、あるというだけのひどいものだった。現在の HP とは隔世の感があるが、とにかくその存在が役割を果たしたと思う。
- **設立趣意書：** “農学に関する科学技術政策を策定し、実施する立場から一定の距離をおいて、政策ならびに政策がもたらした結果について大局的観点から評価し、長期的展望に立って意見を述べる組織”であるはずの農学アカデミーは、第 6 部会で様々な意見が付け加わり、さらにアカデミーが学術会議に置き換わってしまった。学術会議の会員が同時に農学アカデミーの会員であるわけだから仕方がない、と思うことにした。しかし、農学アカデミーこそ大局的・長期的視野に立って農学政策を批判する勇気を持って頂きたい。